

「いきがい大学」始末記

——それは一本の電話から始まった——

● 土 屋 博 映

一、発 端

1、はじめに

それは平成14年7月。まだ短大に勤務していた頃、僕の研究室の電話が鳴った。

「あの、土屋さんですか、私、富岡高校で同級生だった黒沢ですが」

「え、もしかして、黒沢陽子さんですか」

「そうです、わあ、おぼえてくれたんですね」

「もちろんですよ、3年の時、E組でしたよね」

「そうです、今は結婚して田熊といいます」

会話をしているうちに記憶が蘇ってくる。言葉というものはすごいものだといつも思う。方言をちょっと使いたくなる気分になる。黒沢さんは確か文芸部に属してい

て、玉木さんという親友がいたはずだ。いつも二人仲良かったのが妙に記憶に残っている。現在世界遺産指定を目論んでいる富岡製糸工場のある富岡市で、ただ一つ男女共学の高校が富岡高校で、それも男子300に対し、わずか女子50なので、男子は大抵の女子の名前は覚えてしまうわけである。なお富岡高校は前田藩の米の集積所として藩邸が七日市という場所にあり、七日市藩と呼ばれた。また初代水戸黄門役として有名な東野英次郎は本校の第2期の卒業生である。

その電話がきっかけとなって、僕は埼玉県公民館の講座を担当することになった。彼女は埼玉県の小学校の教師をしていたが、現在馬宮公民館に勤務しているのだという。この時点では、僕がまさ

か埼玉県新座市の女子大に勤務するなどとは、まったく考えられもしない未来だった。

2、馬宮公民館

平成15年7月、数年に一度という大病にかかり、ふらふらの状態で公民館に向かった。途中、タクシーが道を間違えるというハプニングがあったりし、ようやく馬宮公民館にたどり着いた。待ち受けていた田熊さんは高校時代とまったく変わらない笑顔。楽しき高校時代が脳裏に少し浮かんで、他の職員さんとともにしばし昔話に花が咲いた。

馬宮公民館の雰囲気はとてもよく、それまでの、埼玉は東京までの途中駅、程度のイメージしかなかったのが、一気に距離が縮まった感じがした。

この講座は10月まで全10回行われた。夏の始めに始まり、終了したのが秋という長丁場。その間には母がなくなり、講座を1回延期してもらったこともある、思い出多き公民館講座となった。最終回終了後、田熊さんが公民館の前で、

こちらが見えなくなるまで手を振ってくれたことが昨日のこのように思い出される。あれから3度の講座を開講し、すっかり馬宮公民館とも親しくなった。田熊さんは翌年、公民館から近くの馬宮小学校の教頭として栄転した。また講座の最後の日にはわざわざ小学校から訪れ、再び、僕を見送ってくれた。

3、与野公民館

ところで、その講座に別の公民館の方が聴講に来てくれた。さいたま市与野公民館の太田さんと山中さんの二人だ。この二人と意気投合し、平成16年2月から講座を開くこととなった。こちらは全5回、このくらいが一番やりやすいので、以後馬宮公民館も全5回の講座にしてもらった。とにかく女子大に行く前にやたらと埼玉との関わりが出来たのも、何かの縁かと思う。死んだ母がそうしてくれたのかと、僕は霊の存在を信じたくなった。

与野公民館の最終日には、お二人が打ち上げの会を、新都心で開

いてくれた。仲間の方も何名か加わり、楽しい飲み会だった。お酒の好きな僕は大いに酔い、酔うと眠くなるので、先に失礼したが、思い出の与野公民館だった。

その席で知ったのだが、馬宮公民館での第1回目、ふらふらの僕の講座を最初に聴講したのが太田さんで、第2回目に聴講し、僕と講座の相談をして車で大宮まで送ってくれたのが山中さんだったということ。そういえば第1回目、ちょっと遅れて一番後ろの席に座った人がいた。案内したのが田熊さんだったと思う。あれが太田さんだったのだ。

4、田島公民館

平成17年4月、女子大に移ると、今度は与野公民館の太田さんから電話があった。

「土屋先生、太田です。与野の講座ではお世話になりました」

「あ、どうも、こちらこそ」

「実は私、今度、田島公民館に転勤になりました。そのお知らせと、田島公民館で先生の講座を考えているのですが、やっていただ

けますでしょうか」

僕は、電話のやりとりは普通に顔をあわせた時よりも鮮明に覚えている。音声学などやっているからかもしれない。太田さんは、馬宮で僕の講座を最初に聞き、与野、さらに田島へと僕を導いてくれた。田島では平成18年2月から3月まで全3回開講した。

5、いきがい大学

1、発端・企画

そして平成18年4月、また太田さんから電話があった。

「土屋先生、太田です。田島の講座ではお世話になりました」

「あ、どうも、こちらこそ」

「実は、私、今度、『いきがい大学』に転勤になりました。そのお知らせと、女子大で『いきがい大学』を開講したいという話が持ち上がっているのですが、いかがでしょうか」

太田さんは、なかなか企画力のある人である。ただ、今度の話はちょっと複雑で、太田さんが前回ほど、ストレートに意向を伝えられない訳があった。電話の声も心

なしか、申し訳なさといった雰囲気を感じ取れた。

それは、今までの公民館関係は、すべてこちらが出向という形をとっていたので、僕一人の都合がつけば、それで事足りていたわけであるが、今度は「いきがい大学」そのものが女子大で行われる。つまり女子大のキャンパスを使用するということになるというのである。これには少々びっくり。私一人ではとても結論は出せない。大学側の返答如何では、計画は暗礁に乗り上げる。

5月、いきがい大学の梶山さんという方から、太田さんからの紹介ということで電話があった。

「いきがい大学の梶山と申します。このたびはご迷惑をおかけします」

「土屋です。太田さんからうかがいましたが、私自身はオッケーです。やる気です」

「ありがとうございます。では女子大まで伺って、直接打合せしたいのですが」

「そのことなのですが、何せ、女子大のキャンパスを他の機関が

大学として使うのは初めての経験のようで、即回答はできないんですよ」

「それはそうですね。ではどうすればいいのでしょうか」

「入試広報の中島課長に伝えます。彼から、そちらに連絡が行きますので、彼とやりとりして決着を付けてください。それまでは私はノータッチ、ということにさせていただきます。」

ということで、こちらは中島氏に全面的にお願いすることにした。いきさつを話すと、彼は快く引き受けてくれた。彼はとにかく超多忙の中、淡々と仕事を片付ける立派な男である。短大・女子大にとって有能な人材として、よい意味で重宝がられている。

その後、山田副学長に、たまたま構内で出会ったので、立ち話で失礼だったが、この件について、軽くお願いしておいた。山田先生もまた淡々と笑顔を絶やさず仕事を片付けていかれる方で、実力と人間性どちらも僕は尊敬している。山田—中島ラインが成立すればこれは絶対にうまくいくと確信

した。

そして、内容と日程が決定したのが7月であった。中島氏から連絡があった。

「『一日いきがい大学』は女子大キャンパスを使って行う。

担当講師は土屋博映（「若者言葉」について講義）

期日 平成18年11月27日（水）

時間 10時00分～11時30分（講義）

13時00分～14時30分（討論会）

参加者 いきがい大学生130名（10クラス） 女子大生（討論会参加）」

ということであった。実は平成17年10月、私が「若者言葉がなぜ悪い」というテーマで女子大の公開講演会を行ったのを梶山さんが知っていて、それで私に白羽の矢が立ったものであるらしい。人の世は、自分の行動と縁で広がりをもつのだなあということを実感した。

後で知ったのだが、「いきがい大学」というのは、埼玉県の外郭団体が公的なものとして、正式なカリキュラムを持ち、1年間で修了する大学であり、資格は「60歳

以上であること」ということだった。その大学は、数箇所あり、それぞれ独自に運営されているのである。今回女子大が受け入れたのは、蕨校舎であるが、他の大学も埼玉大学とか県立大学とか分かれて「一日大学」を行事として行っているということだ。担当は桑原さんという方になった。それにしても蕨校舎だけで130名というのは結構大変な人数だ。ガッツが売り物の僕にも、多少、不安感が脳裏を横切った。

二、展 開

7月に日程が決定したが、8月9月は夏季休暇であるので、行動は9月の最終週、アドバイザー期間から始めることにした。大問題は何かということ、午後の「討論会」である。年配の方と若者との交流を深めるのが「一日いきがい大学」のコンセプトであるので、僕の授業というよりは、むしろそちらに重きがあるくらいなのだ。10クラスなので、各クラス最低2～3名の女子大生を選出しなくてはならない。20～30名という人数は、三年のゼミ（16名）と四年の卒業論

文（10名）で、何とか折り合いがつくと考えたが、まずキャンパスで顔をあわせた顔見知りの女子大生には片端から声をかけていこうと考え、実行し、何人か一本釣りに成功した。次には担当講義・演習のすべてで宣伝活動をすることにした。宣伝活動は次の7講座。

○国語学概論 B（月2・130名）

○プロゼミⅡ（月4・21名）

○イベント論（火4・250名） ○

国語史 B（火5・60名） ○テ

ーマ演習（金3・16名） ○国語音

声学 B（金4・150名） ○卒業論

文（土5・10名）

僕は、授業で必ずレポートを提出させるので、参加したいものはその旨記すように伝えた。ただし、水曜日には必修がかぶっているので、それと重ならないように。午前と午後に分けて（午前・午後両方参加も可）申し込ませることにした。その人数が意外に多く、参加したい意向の学生は100名を越えた。うれしい悲鳴である。とくに「イベント論」に参加者が多く、それを履修しているマネジメント学部の学生の参加が多かったこと

には感動した。さすがマネジメントと納得した。予想外なのは、演習・プロゼミ・卒業論文の参加者が少なかったことだ。これは他の授業、就職活動などの影響もあるかもしれない。この学生をラフな名簿に僕が作成し、それを中島課長に送付、正式な名簿として作成してもらった。これが10月末日、学園祭の前までに完了。

次に、参加する意欲を試すために11月の7日までに希望者全員にレポートを提出させた。テーマは①「『若者言葉』に何を期待するか」（午前参加者）②「討論会で何を質問したいか」（午後参加者）。それを整理し、最終決定分を中島課長に渡したのが11月の10日、これで参加者の概要が掴めた。

11月に入ってから毎日のように中島氏と連絡を取り合い、13日にはいきがい大学の梶山さんと桑原さんが中島氏と打合せに来るので、授業前のわずかな時間、中島氏を交え、お二人と顔合わせをした。とにかく僕は論文4本をかかえ、予算委員会委員長としての仕事も始まり、授業に全力投入

の中でのいきがい大学、とにかく夢中だった。忙しいなどというのはこちらの勝手に、だからといっていきがい大学に手を抜いてよいという理屈は成り立たない。

最後の問題は教室である。午後の討論会は1号館の近接した教室に10クラスを配置した。問題は午前の講義に充てる教室が、図書館視聴覚室しかないのである。視聴覚室は定員159名。いきがい大学学生130名では、学生分の余裕は30名しかない。一時は100名以上の学生が来たらどうしようと、視聴覚室で中島氏と相当思案した。まあ結果的にいきがい大学学生は100名ほど、女子大生も午前中参加者は欠席を見込むと60名程度と予想され、当日、補助椅子は必要ないと見込まれた（実際には補助椅子を用意し、そこを好んで座った学生もいたが）。

スケジュールは最終的に、次のように決定。

☆いきがい大学 9時30分集合 9時45分ホームルーム 10時00分～11時30分授業 11時30分～13時00分昼食・休憩 13時00分～14時30

分討論会・終了後各クラスごとに解散

☆女子大学 上記いきがい大学よりもやや早めに集合。

ということで、後は教授会等で、教職員、学生たちに知らせめ、当日の晴天を祈るばかりになった。

三、実 施

さて当日、快晴とは言えないまでも、一応の晴天。愛用の自家用車で午前6時00分、女子大到着。それから予習。とにかく忙しい日々であった。本来なら一週間前からゆっくりと準備するのだが、当日8時30分、ぎりぎりであろうやくきちんと講義が出来る準備が整った。

9時に図書館前集合。中島氏も忙しい中、定時に駆けつける。女子大生も受付係と、10名ほどの参加者がすでに集合していた。早速受け付け係はスタンバイ。参加者もきちんと受付をさせる。

その他の女子大生参加者はほとんど9時15分の集合時刻には到着。なかなかよい集まりだ。いきがい大学の学生との混雑を避けたのだが、いきがい大学生は大部分

が9時30分の集合時間に揃ってやってきた。おそらく学バスは混んだだろうと推測。視聴覚室は、女子大生といきがい大学生とで満員。熱気にあふれている。

9時45分、いきがい大学のホームルーム開始。女子大生もここから同時参加。本来のいきがい大学では、午前の講義はいきがい大学生のみ、午後の討論会から女子大生の参加ということらしかったが、同時参加のほうが雰囲気がかっていい、と考え、僕の独断で参加させてみたが、やはりこれはよかった。進行はいきがい大学の担当者、桑原さん、梶山さんがリード。女子大側も中島課長、障子さん、濱本さんらが補助、さらにいきがい大学の当番学生が挨拶、そして山田副学長の挨拶後、いよいよ10時00分、定時に「若者言葉」の授業がスタートした。

授業は、パソコン画面を使いながら、古代より言葉は変遷するものであること、若者言葉は当然その流れにのっているのです、悪いと決め付けるのは、学問上はできないこと、などを述べ、和気藹々の

うちに進行した。とくに具体例をあげていく度に、いきがい大学生側から驚きの声があがり、それを取り巻く女子大生側からもその驚きに対する驚きの声があがった。もちろん双方の驚きの声は意味が違う。その都度、女子大生側に、各班の班長を中心に若者言葉の確認をしたところ、若者言葉の具体例に対し、「使用する」「知っている」の反応を示すので、いきがい大学生からは、一段と驚きの声があがった。これだけ「若者言葉」の理解がなされていないことは、僕にとっても驚きだった。しかし、このやりとりで双方のコミュニケーションが取れ、午後の討論会につながった。やはり女子大生を午前の講義に参加させたのは、女子大生にとっても、いきがい大学生にとってもよかったと思う。

講義は定刻11時30分に終了。5分ほど、以後の予定などに担当者等の指示があり、午後の討論会の教室を確認しながら昼食のためにグリーンホールに向かう。グリーンホールでは、僕がいきがい大生全員にランチ等に並ぶ場所を指示

し、こちらも昼食と入試関連の打合せに一旦その場を離れる。なおいきがい大学生は、ラーメン注文者が圧倒的に多く、そば・うどんではなかったところにエネルギーを感じた。

午後は13時より、7会場、10クラスに分れて討論開始。僕は1クラス5分ずつかけて計2回ずつ回り、それぞれ2回目ではまとめの挨拶をし、順次解散となった。いきがい大学生の多いクラス、少ないクラス、静かなクラス、にぎやかなクラス、といろいろあったが、それぞれが楽しいひと時を過ごしたのは、学生の、事後提出の感想文でよくわかる。

「若さを感じた」「いきがい大学に入ってみたい」「つっちー（土屋のことです）、こんなすばらしい機会を与えてくれてありがとう」「女子大四年間で最高の思い出です」などを読むと、「一日いきがい大学」を実行して本当によかったと思う。いきがい大生みなさんを「ごきげんよう」の挨拶とともに送り出し、私の長い一日は終わった。その後の教授会がなけ

ればもっとよかったのだが。

四、反 省

とにかく初めての試みとしてはうまくいったほうだと思う。一番の問題としては、参加したい学生がもっと多かったのに、授業期間中なので、参加させられなかったこと。また、いきがい大学について、あまりにも資料不足だったこと。もう少し、僕を含め、女子大側に知識があれば、午前の授業にも午後の討論会にも、もっとよい流れが作れたかと思う。

ともあれ、僕はもちろんだが、学生たちもよく頑張った。参加者全員に花丸をつけてあげたい気持ちだ。また中島課長をはじめ、多くの職員の方々には大変お世話になった。また教授会の構成員の皆様にもいろいろご協力いただき、心より感謝申し上げたい。そして、こういう機会を与えてくれた、いきがい大学の学生さんたち、梶山さん・桑原さん、さらにきっかけを作ってくれた太田さんにも心からお礼を申し上げる。

人の縁は大切なもの、田熊さんの一本の電話から、いきがい大学

まで縁の尊さ、大切さと、チャンスがあれば絶対にチャレンジすることが必要だということを身にしみて感じた。なぜなら、チャレンジすれば必ず、生きているという

実感、生きていてよかったという感動を体得できるから。思い出のいきがい大学という大イベントが、ここに完了した。